

中島  
敦

狐  
憑





狐

憑



ネウリ部落のシヤクに憑つきものがしたという評判である。色々なものがこの男にのり移るのだそうだ。鷹たかだの狼おおかみだの獺かわうそだの霊れいが哀あわれなシヤクにのり移って、不思議な言葉を吐はかせるということである。

後に希臘ギリシア人がスキユテイア人と呼んだ未開の人種の中でも、この種族は特に一風いっふう変っている。彼等かれらは湖上に家を建てて住む。野獸やじゅうの襲撃しゅうげきを避さけるためである。数千本の丸太を湖の浅い部分に打うち込んで、その上に板を渡し、

そこに彼等の家々は立っている。床ゆかのところどころに作られた落し戸を開け、籠かごを吊つるして彼等は湖の魚を捕とる。独木舟を操り、水狸や獺を捕とらえる。麻布あさぬのの製法を知っていて、獣皮と共にこれを身にまとう。馬肉、羊肉、木苳きいちご、菱ひしの実等などを喰くい、馬乳や馬乳酒を嗜たしなむ。牝馬めすうまの腹に獣骨の管を挿入さしいれ、奴隸どれいにこれを吹ふかせて乳を垂下したたらせる古来の奇法きほうが伝えられている。

ネウリ部落のシヤクは、こうした湖上民の最も平凡へいぼんな一人であった。

シヤクが変になり始めたのは、去年の春、弟のデツク

が死んで以来のことである。その時は、北方から剽悍ひょうかん  
 な遊牧民ウグリ族の一隊が、馬上に偃月刀を振りかざし  
 て疾風しつぷうのごとくにこの部落を襲おそうて来た。湖上の民は必  
 死になつて禦ふせいだ。初めは湖畔こはんに出て侵略者しんりやくしゃを迎え撃う  
 った彼等も名だたる北方草原の騎馬兵きばへいに当りかねて、湖  
 上の栖処すみかに退いた。湖岸との間の橋桁はしげたを撤てつして、家々の  
 窓を銃眼じゅうがんに、投石器や弓矢で応戦した。独木舟を操る  
 に巧みたくでない遊牧民は、湖上の村の殲滅せんめつを断念し、湖畔  
 に残された家畜かちくを奪うばっただけで、また、疾風のように北  
 方に帰って行つた。後あとには、血に染にじんだ湖畔の土の上に、

頭と右手との無い屍体したいばかりが幾いくつか残のこされていた。頭  
 と右手だけは、侵略者が斬取きりとって持もって帰かえってしまった。  
 頭蓋骨ずがいこつは、その外側を鍍金とぎんして髑髏杯どくろはいを作るため、右手  
 は、爪つめをつけたまま皮を剥はいで手袋てぶくろとするためである。  
 シヤクの弟のデスクの屍体もそうした辱はずかしめを受けて  
 打捨うちすててられていた。顔が無いので、服装ふくそうと持物まさかりによっ  
 て見分ける外はないのだが、革帯の目印めじるしと鉞かざりの飾かざりと  
 によって紛れまぎもない弟の屍体をたずね出した時、シヤク  
 はしばらく茫ぼやつとしたままその惨めみじな姿を眺ながめていた。  
 その様子が、どうも、弟の死を悼いたんでいるのとはどこか違ちが



うように見えた、と、後あとでそう言っていた者がある。

その後間もなくシヤクは妙みょうな譚言うわごとをいうようになった。何がこの男にのり移わかって奇怪きかいな言葉を吐かせるのか、初め近処の人々には判わからなかつた。言葉つきから判断すれば、それは生きながら皮を剥がれた野獣の霊でもあ  
るように思われる。一同が考えた末、それは、蛮人ばんじんに斬取られた彼の弟デツクの右手がしやべっているのに違  
ないという結論に達した。四五日すると、シヤクはまた別の霊の言葉を語り出した。今度は、それが何の霊であるか、すぐに判つた。武運拙つたなく戦場に斃たおれた顛末てんまつから、

死後、虚空こくうの大霊たいれいに頸筋くびすじを掴つかまれ無限むげんの闇黒あんこくの彼方かなたへ投げやられる次第しだいを哀かなしげに語るのは、明あきらかに弟あにデツクその人と、誰だれもが合点がてんした。シヤクが弟の屍体しんたいの傍かたわらに茫然ぼうぜんと立っていた時、秘ひそかにデツクの魂たましいが兄あにの中に忍しのび入ったのだと人々は考えた。

さて、それまでは、彼の最も親しい肉親、及びおよその右手みぎのこととて、彼かれにのり移うつるのも不思議ふしぎはなかつたが、その後一時平静へいぜいに復かえったシヤクが再び譫言しんげんを吐はき始めた時、人々は驚おどろいた。今度はおよそシヤクと関係かんけいのない動物や人間共の言葉ことばだったからである。

今までにも憑きもののした男や女はあったが、こんな  
に種々雑多なものが一人の人間にのり移った例ためしはない。  
ある時は、この部落の下の湖を泳ぎ廻る鯉こいがシヤクの口  
を仮かりて、鱗族いろくずたち達の生活の哀しさと楽しさとを語った。  
ある時は、トオラス山の隼はやぶさが、湖と草原と山脈と、ま  
たその向うの鏡のごとき湖との雄大ゆうだいな眺望ちようぼうについて語  
った。草原の牝狼が、白けた冬の月の下で飢うえに悩みなが  
ら一晩中凍いてた土の上を歩き廻る辛つらさを語ることもあ  
る。

人々は珍めずらしがつてシヤクの謔言を聞きに来た。おか

しいのは、シヤクの方でも（あるいは、シヤクに宿る靈共の方でも）多くの聞き手を期待するようになったことである。シヤクの聴衆ちようしゆうは次第にふえて行つたが、ある時彼等の一人がこんなことを言った。シヤクの言葉は、憑きものがしやべっているのではないぞ、あれはシヤクが考えてしやべっているのではないかと。

なるほど、そう言えば、普通ふつう憑きものした人間は、もつと恍惚こうこつとした忘我の状態でしやべるものである。シヤクの態度には余り狂気きやうきじみた所がないし、その話は条理が立ち過ぎている。少し変だぞ、という者がふえて来

た。

シヤク自身にしても、自分の近頃ちかごろしている事柄ことの意味を知ってはいない。もちろん、普通のいわゆる憑きものと違うらしいことは、シヤクも気がついていてる。しかし、なぜ自分はこんな奇妙な仕草を幾月いくつきにも亘わたって続けて、なお、倦うまないのか、自分でも解わからぬ故、やはりこれは一種の憑きもののせいと考えていいのではないかと思っ  
ている。初めは確かに、弟の死を悲しみ、その首や手の行方ゆくえを憤いきどおろしく思い画えがいている中うちに、つい、妙なことを口走くってしまったのだ。これは彼の作さく為いでないと見え

る。しかし、これが元来空想的な傾向を有つシヤクに、自己の想像をもつて自分以外のものに移ることの面白さを教えた。次第に聴衆が増し、彼等の表情が、自分の物語の一弛一張につれて、あるいは安堵の・あるいは恐怖の・偽ならぬ色を浮べるのを見につけ、この面白さは抑え切れぬものとなった。空想物語の構成は日を逐うて巧みになる。想像による情景描写はますます生彩を加えて来る。自分でも意外な位、色々な場面が鮮かにかつ微細に、想像の中に浮び上つて来るのである。彼は驚きながら、やはりこれは何かある憑きものが自分

に憑たいているのだと思わない訳に行かない。但ただし、こうして次から次へと故知らず生み出されて来る言葉共のちのちを後々までも伝えるべき文字という道具があつてもいいはずだということに、彼はいまだ思いたい到らない。今、自分の演じている役割が、後世どんな名前と呼ばれるかということも、もちろん知るはずがない。

シヤクの物語がどうやら彼の作為らしいと思われ出してからも、聴衆は決して減らなかつた。かえつて彼に向つて次々に新しい話を作ることを求めた。それがシヤクほんようの作り話だとしても、生来凡庸なあのシヤクに、あんな

素晴らしい話を作らせるものは確かに憑きものに違いな  
いと、彼等もまた作者自身と同様の考え方をした。憑き  
もののしていない彼等には、実際に見もしない事柄につ  
いて、あんなに詳くわしく述べることなど、思いも寄らぬか  
らである。湖畔の岩陰いわかげや、近くの森の樅もみの木の下や、あ  
るいは、山羊やぎの皮をぶら下げたシヤクの家すわの戸口の所な  
どで、彼等はシヤクを半円にとり囲んで坐りながら、彼  
の話を楽しんだ。北方の山地に住む三十人の剽ひようとう盗の話  
や、森の夜の怪物の話や、草原の若い牝牛おうしの話などを。  
若い者達がシヤクの話に聞き惚ほれて仕事を怠おこたるのを



見て、部落の長老連が苦い顔をした。彼等の一人が言った。シヤクのような男が出たのは不吉の兆である。もし憑きものだとすれば、こんな奇妙な憑きものは前代未聞だし、もし憑きものでないとすれば、こんな途方もない出鱈目を次から次へと思いつく気違いはいまだかつて見たことがない。いずれにしても、こんな奴が飛出したことは、何か自然に悖る不吉なことだと。この長老がたまたま、家の印として豹の爪を有つ・最も有力な家柄の者だったので、この老人の説は全長老の支持する所となった。彼等は秘かにシヤクの排斥を企んだ。

シヤクの物語は、周囲の人間社会に材料を採ることが次第に多くなつた。いつまでも鷹や牡牛の話では聴衆が満足しなくなつて来たからである。シヤクは、美しく若い男女の物語や、吝嗇けちで嫉妬しつと深い老婆ろうばの話や、他人には威張いばつていても老妻にだけは頭の上がらぬ酋しゅうちよう長の話をするようになった。脱毛期だつもうきの秃鷹はげたかのような頭をしているくせに若い者と美しい娘むすめを張合みじつて惨めみじに敗れた老人の話をした時、聴衆がドツと笑つた。余り笑うのでその訳を訊たずねると、シヤクの排斥を発議した例の長老が最近それと同じような惨めな経験をしたという評判だから

だ、と言った。

長老はいよいよ腹を立てた。白蛇はくじやのような奸智かんちを絞しぼつて、彼は計をめぐらした。最近に妻を寢取ねとられた一人の男がこの企くわだてに加わった。シヤクが自分にあてこするよ  
うな話をしたと信じたからである。二人は百方手を尽つくして、シヤクが常に部落民としての義務を怠おそっているこ  
とに、みんなの注意を向けようとした。シヤクは釣つりをし  
ない。シヤクは馬の世話をしない。シヤクは森の木を伐き  
らない。獺すのどの皮を剥がない。ずっと以前、北の山々から  
鋭すのどい風が鵝毛がもうのような雪片を運んで来て以来、誰か、

シヤクが村の仕事をするのを見た者があるか？

人々は、なるほどそうだと思った。実際、シヤクは何もしなかつたから。冬籠りに必要な品々を頒け合う時になつて、人々は特に、はつきりと、それを感じた。最も熱心なシヤクの聞き手までが。それでも、人々はシヤクの話の面白さに惹かれていたので、働かないシヤクにも不承無承冬の食物を頒け与えた。

厚い毛皮の陰に北風を避け、獣糞や枯木を燃した石の炉の傍で馬乳酒を啜りながら、彼等は冬を越す。岸の蘆が芽ぐみ始めると、彼等は再び外へ出て働き出した。

シヤクも野に出たが、何か眼めの光も鈍にぶく、呆ぼけたように見える。人々は、彼がもはや物語をしなくなったのに気が付いた。強しいて話を求めても、以前したことのある話の蒸し返ししか出来ない。いや、それさえ満足には話せない。言葉つきもすっかり生彩を失ってしまった。人々は言った。シヤクの憑きものが落ちたと。多くの物語をシヤクに語らせた憑きものが、もはや、明らかに落ちたのである。

憑きものは落ちたが、以前の勤勉の習慣は戻もどって来なかつた。働きもせず、さりとして、物語をするでもなく、

シヤクは毎日ぼんやり湖を眺めて暮らした。その様子を  
 見る度に、以前の物語の聴手達は、この莫迦面の怠け者  
 に、貴い自分達の冬籠りの食物を頒けてやったことを腹  
 立たしく思出した。シヤクに含む所のある長老達は北叟  
 笑んだ。部落にとって有害無用と一同から認められた者  
 は、協議の上でこれを処分することが出来るのである。  
 硬玉の頸飾を着けた鬚深い有力者達が、よりより相  
 談をした。身内の無いシヤクの為に弁じようとする者は  
 一人も無い。

ちようど雷雨季がやって来た。彼等は雷鳴を最も忌み

恐れる。それは、天なる一眼の巨人の怒れる呪いの声で  
 ある。一度此の声が轟くと、彼等は一切の仕事を止め  
 て謹慎し、悪しき気を祓わねばならぬ。奸譎な老人は、  
 占卜者を牛角杯二箇でもって買収し、不吉なシャクの存  
 在と、最近の頻繁な雷鳴とを結び付けることに成功した。  
 人々は次のように決めた。某日、太陽が湖心の真上を過  
 ぎてから西岸の山毛櫨の大樹の梢にかかるとの間、  
 三度以上雷鳴が轟いたなら、シャクは、翌日、祖先伝来  
 のいきなりに従って処分されるであろう。

その日の午後、ある者は四度雷鳴を聞いた。ある者は

五度聞いたと言った。

次の日の夕方、湖畔の焚火たきびを囲んで盛さかんな饗宴きようえんが開かれた。大鍋おおなべの中では、羊や馬の肉に交まじって、哀れなシヤクの肉もふつふつ煮にえていた。食物の余り豊かでないこの地方の住民にとって、病気で斃れた者の外、すべての新しい屍体は当然食用に供せられるのである。シヤクの最も熱心な聴手だった縮れちぢ毛の青年が、焚火に顔を火照ほてらせながらシヤクの肩かたの肉を頬張ほうばった。例の長老が、憎にくい仇かたきの大腿骨だいたいこつを右手に、骨に付いた肉を旨うまそうにしやぶった。しやぶり終おってから骨を遠くへ抛ほうると、水音



がし、骨は湖に沈しずんで行つた。

ホメロスと呼ばれた盲めくら人のマエオニデエスが、あの美しい歌うたどもを唱い出すよりずっと以前に、こうして一人の詩人が喰われてしまったことを、誰も知らない。

(昭和十七年七月)



日本文学電子図書館

---

「中島敦 ちくま日本文学012」

著 者：中島 敦

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2009年6月30日 第3刷発行

---



日本文学電子図書館